

## 翻刻『風月小誌』

要 木 純 一

今では忘れ去られたが、明治初期の島根県で、平賀静遠（半助）という漢詩人が活躍していた。この『風月小誌』第一号〜第三号は、彼が中心となって編輯した、漢詩と和歌の選集である。この時期の山陰文壇を論ずるのに、必須の資料であるにもかかわらず、あまり知られていないことを遺憾に思い、要木はかつて国立国会図書館所蔵のテキストを影印した。〔影印 風月小誌 風流新誌〕二〇一〇年三月発行 非売品〕ところが、原本の劣化甚だしく、読みづらいくところが多いので、ここに翻刻を試みる。活字のかすれた部分は、前後関係から臆測した。もとより、浅学非才、間違いも多からうが、影印本と合わせて読めば、この書所載の情報が格段に得やすくなるかと思う。この『風月小誌』の書誌や平賀静遠の履歴については、要木「明治初期の出雲漢詩壇について」〔荇田耕一・原豊二編『出雲文化圏と東アジア』所収 勉誠出版 二〇一〇年八月）に簡単な紹介を記したので、そちらも参考にして頂きたい。

内容を正確に伝えることに重きをおき、字の配置や大きさなどのレイアウトは、原典を再現することに意を注がなかった。たとえば、作者名の下の小字割注を本文と同ポイント、同行にした。傍点は、評の内容にかかわるのでできるだけ原文通り振った。便利のために、各号、各ジャンル（漢詩・和歌）毎に、作品に連番をアラビア数字で振った。所謂変体仮名は、現行の字体に統一した。漢字の表記は常用漢字体を基本としたが、一部、要木の趣味により、旧体字のままにしているところがある。【 内に要木の説明や校訂を加えた。

【『風月小誌』第一号】

【表紙】左上に「東京図書館蔵書之印」の所蔵印が捺されている。標題右のあたりに「余始」二字の落書あり】  
明治十三年四月発行

風月小誌 第壹号

風月吟社

【本文】

引【欄外上右に特43 888の横書き整理番号あり】

人間撰著。有<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>者。有<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>者。有<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>者。可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>者。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>。可<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>者。断々不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>。独至<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>者。附<sub>レ</sub>其人<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>也。』静遠睡仙二史以<sub>レ</sub>詩為<sub>レ</sub>命者也。頃編<sub>レ</sub>風月小志<sub>レ</sub>成。懇<sub>レ</sub>余評<sub>レ</sub>之。』所<sub>レ</sub>貴<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>書者。為<sub>レ</sub>其有<sub>レ</sub>用也。故不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>者而後始<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>之。如<sub>レ</sub>此冊<sub>レ</sub>。雖<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>断断不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>者之比。要不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>二史自<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>自娛<sub>レ</sub>。其不<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>損益於世<sub>レ</sub>也固矣。殆所<sub>レ</sub>謂有<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>者已。【已はもと己に作る。今改む】大丈夫不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>二世不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>之書。屑々從<sub>レ</sub>事於此<sub>レ</sub>。至<sub>レ</sub>乃<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>人之評<sub>レ</sub>。人將<sub>レ</sub>笑<sub>レ</sub>其多事<sub>レ</sub>也。』雖<sub>レ</sub>然。人貴<sub>レ</sub>自知<sub>レ</sub>。吾人在<sub>レ</sub>世。亦非<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>者乎。以<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>之人。為<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>之書。於<sub>レ</sub>理無<sub>レ</sub>不可<sub>レ</sub>者。況自<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>自娛。為<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>。其權皆在<sub>レ</sub>我。於<sub>レ</sub>人何関焉。則人之所<sub>レ</sub>笑<sub>レ</sub>以為<sub>レ</sub>多事<sub>レ</sub>者。我多見<sub>レ</sub>其多事<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>笑也。因評而還<sub>レ</sub>之。併書以為<sub>レ</sub>引。十三年花朝老雨居士

風月小志の緒言

古今和歌集の序に花になく鶯水にすむかはつの声をきけはいきとしいけるものいつれか歌をよまさりけると見えたり況や人たらむもの豈おもひ無からむや其思をのへ心をやるは歌とから歌にありこれの風月小志は其意を得て取集めたる也

けりそもく花鳥風月は文人学士の常に愛翫るものなりまことや古へ人のいひけんやうに遠き所も出たつあしもとよりはしまりて年月をわたり高き山も麓の塵ひちよりなりてあま雲たなひくまでおひのほるとかや此小志も平賀勝田村上三氏の手になれりといへとも末つひに谷水の大海に入るか如く大志の基本ならさらめやと感<sup>カマ</sup>けおもふまにくそのよし一くたり端つかたにかいつくるになんありける

明治十三年三月宿の名におふ花もよひするころ

朱桜岡のあるし守手しるす

## 風月小誌第一号

### 1 偶題

老雨居士

皇統三千歳。天威五大洲。文明魯英佛。無<sup>ニ</sup>此古金甌<sup>一</sup>。

### 2 山中秋夕

积苔洲

汲水奚童去未<sup>レ</sup>還。独吹<sup>ニ</sup>爐火<sup>一</sup>暮雲間。一声鳴鹿不知<sup>レ</sup>処。寒翠依微孕<sup>レ</sup>月山。

雨森老雨云。澹雅清遠。近人詩冊中。所<sup>ニ</sup>絶無<sup>一</sup>而塵有<sup>一</sup>。名下無<sup>ニ</sup>虚士<sup>一</sup>。信。

### 3 謾成

勉齋学人

不<sup>レ</sup>願公侯位。不<sup>レ</sup>願將相官。願<sup>レ</sup>之亦何益。此生但迂慢。薄田五六頃。好書三百篇。母妻不<sup>レ</sup>説饑。兒子不<sup>レ</sup>啼寒。如此則足耳。悠然天地寬。

大沼枕山云。瀟灑勁直。詩如其人。其人今之古人也。豈不<sup>ニ</sup>欽想<sup>一</sup>哉。○老雨云。安<sup>レ</sup>分之語。有<sup>ニ</sup>擊壤遺響<sup>一</sup>。

### 4 咏史

笠山 中村氏出雲広瀬人

郡県良因國勢張。焚<sup>レ</sup>書不<sup>ニ</sup>復法<sup>一</sup>先王。腐<sup>レ</sup>儒休<sup>レ</sup>掉雷同舌。千古英雄秦始皇。

老雨云。慧眼如<sup>レ</sup>炬。咏<sup>レ</sup>史者不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>此邪。

### 5 午睡

錦霞莊主 勝田氏名紹興字君幹出雲松江人

甘夢誰呼覚。半窓日未<sup>レ</sup>西。落花忽成<sup>レ</sup>雨。中有<sup>ニ</sup>禽啼<sup>一</sup>。

老雨云。天籟自然。極淡遠之致。

6 步月

拳齋 服部氏名膺字子高出雲松江人  
爽氣吹空月色清。滿庭無處不虫声。苔間濃露明千点。觸屐織珠掉又生。

枕山云。巧密膩映。鎔鍊備致。

7 寄壁間布袋

蘭窓主人 阪本氏名世敬字士直出雲松江人  
純朴自存太古風。多年分榻此相同。便々汝腹藏何物。味在笑而不答中。

老雨云。善戲謔。○山村勉齋云。惟其無所藏。以故便々。

8 紙鷲

三板居士 清水氏周防熊毛郡人  
揚々得々奏何功。不遇虛鳴驚碧翁。憐汝生涯托危殆。夕陽影裏一絲風。

老雨云。諷刺之意。自見結句更妙。人人不自覺。可憫。

9 山莊春晚

鱸汀 鈴江氏出雲松江人  
日永無人叩竹扃。落花不播寂門庭。有誰愛惜春光老。葉底一聲鶯語青。

老雨云。楊万里詩。杏花林裏犬声紅。結句所本。○勉齋云。溫柔詩教也。使多少世間佶屈語者流愧死。

10 美甘投宿

蕉窓 太田氏名義和字公利出雲松江人  
酒醒軫怯客衣單。孤枕蕭々夢未安。月黑前溪魍魅語。滿山雨氣冒窓寒。

河野苔洲云。奇峭。

11 次小竹先生山靜帖韻 原十首 適処山人 儀滿氏出雲平田人

矮屋草茅壞。衡門薜蘿古。唯緣遠市城。自覺恢胸宇。隱者半求名。清流誰踵武。讀書夜未眠。坐聽催花雨。

老雨云。律而帶古調者。第五句。蓋有所感而發。仕官捷避。今古同嘆。○又云。結句婉麗。

12 新潟竹枝

淞雨散人 松田氏名敏字舜卿出雲松江人  
北風怒卷海門潮。不見商船來駐橈。多少樓台都鎖雪。月寒七十二紅橋。

鱸松塘云。余亦作此題絕句二十首。然不得如此豪爽。慚愧慚愧。

13 題画

西山重常 出雲神門郡人

霜月下篷窓。漁翁迷所處。長江一笛風。吹亂蘆花絮。

老雨云。日田遺響。

14 全

春流逸人 高橋氏出雲松江人

桃核争發白交紅。片々篩來亂晚風。花際春流清且淺。遊人揭涉錦波中。

苔洲云。合作。不恥古人。○編者云。際作底如何。

15 書懷

靜所 平賀氏名勝字公明出雲松江人住上野前橋

胆氣雖豪奈此貧。弊衣陋室僅容身。幸然猶有友朋顧。畢竟天公不殺人。

老雨云。斯人而至斯乎。紅顏薄命。古今同嘆。

16 伝信機

横地邦松 隱岐平村人

一線何人架碧空。捷於飛電詎論風。誰凶告往知來妙。寄在無声無臭中。

老雨云。使用經語。絶無痕跡。

17 溪村夜帰

积弘軒 吉田氏出雲松江人

溪村日落乱雲翔。茅屋陰沈水一方。月黑橋頭人不見。野狐吹火夜茫茫。

編者云。一読使人心悸。

18 曉行

北尾漸一郎 出雲松江人住東京

安将三尺絲。繫此欲傾月。立尽柳陰中。水風吹散髮。

老雨云。婉而雅。宋人口吻。○勉齋云。雅而潔。

19 春夜観梅

淞雨散人 相見氏名敏修字允叔出雲松江人

香雪霏々夜洒袍。滿身清氣勸春醪。忽然呼快人抛盞。月出梅花三尺高。

編者云。三四清麗可<sub>レ</sub>愛。○又云。夜作<sub>レ</sub>乱如何。

20 送<sub>三</sub>岡本生巡<sub>二</sub>視都留郡<sub>一</sub>

星秋瘦士 吉岡氏名弘字篤夫松江人住駿河沼津

篠籠<sub>三</sub>之山鬱<sub>二</sub>巖<sub>一</sub>。猿橋之水激<sub>二</sub>怒瀧<sub>一</sub>。世人爭說行路難。君今祇役向<sub>レ</sub>其中<sub>一</sub>。荷能心平道自坦。万苦辛中亦可<sub>レ</sub>惊。君不見世途到处足<sub>二</sub>危險<sub>一</sub>。豈啻猿橋与<sub>二</sub>篠籠<sub>一</sub>。

老雨云。似<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>李白行路難<sub>一</sub>来<sub>甲</sub>。荷能二句。解人語。【甲点はもと甲レ点に作る。今改む】

21 秋晚即成

峡南居士 秋山氏東京人

山、山、秋、色、老、遠、樹、暮、雲、橫、有、約、僧、來、晚、柴、門、墜、葉、聲、

編者云。冷淡有<sub>レ</sub>趣。

22 早春病中作

香洲釣客 米田氏出雲松江人

經、句、疎、懶、廢、吟、哦、一、枕、悠、然、養、宿、痾、骨、相、病、來、同、鶴、瘦、光、陰、夢、裏、似、駒、過、暖、吹、楊、柳、烟、痕、嫩、春、入、梅、花、雪、色、多、  
布襪茅鞋無<sub>レ</sub>可用。踏青時節奈<sub>二</sub>詩魔<sub>一</sub>。【踏青は當に踏青に作るべし】

老雨云。頷聯似<sub>二</sub>顧鉄卿<sub>一</sub>。○編者云。頸聯似<sub>二</sub>真山民<sub>一</sub>。

23 秋湖晚景

桂窓学人 中村氏出雲松江人

白雁黃蘆淺水秋。平波十里夕陽收。隨<sub>レ</sub>風烟靄乍濃淡。一<sub>レ</sub>帶湖山沈又浮。【濃字にもと傍点なし。今補う】

老雨云。清淡。

24 晚秋布志名婦舟

石逕山人 中山氏出雲松江人

山色依微看欲<sub>レ</sub>無。篙頭織月映<sub>二</sub>寒蘆<sub>一</sub>。疎鐘聲落篷窓裡。恰似<sub>二</sub>楓江夜泊<sub>一</sub>。

老雨云。画景宛然。

25 春日閑適 六首

愛月閑客 植崎氏名卓爾字子高出雲松江人。

偏、愛、壺、中、日、月、豈、恠、浮、世、功、名、午、念、忽、覺、幽、夢、黃、鳥、隔、花、一、聲、【二号附正誤に「浮世ハ世上ノ誤」という】  
老雨云。得<sub>レ</sub>体。○編者云。絶塵之風標可<sub>レ</sub>想。

26 閨中春夜

翠軒主人 森氏名信字士敬出雲松江人

孤枕眠醒夜色幽。欲鉤簾箔又慵鉤。白桜花外朦朧月。偏入深閨照暗愁。

老雨云。偏字作者苦心処。○編者云。三四無限情味。

27 春日偶成次睡仙詞兄韻

静心逸史 平賀氏名尚信字秀民出雲松江人

暖風晴日適吟情。片々穿花蝶翅輕。庭院昼長春寂寞。茶香影一窓清。

勉齋云。何其声似放翁也。

28 題画

松濤山人 村上氏名寿字仙輪出雲松江人

斜憑玉檻懶成粧。默読相思書幾行。妬殺天桃花下水。春風夢暖兩鴛鴦。

老雨云。未知。情郎書中說出何等事。○勉齋云。如画。

29 獲清人張庚水墨山水幅喜而有作

静遠居士

隔水青山鬱巖窮。一片行雲逐飛翼。烟鎖樓閣有又無。毫端變化妙無極。誰居画之張瓜田。秀韻堪看稽古力。

君不見世間多少丹青家。胸無書卷浪弄墨。

老雨云。浪弄墨。罵尽万古画人。万牛挽不得。

30 春日雜咏三十首之一

睡仙慵夫

書課倦來憑小櫳。春天不雨也颼々。鐘声徐度山猶睡。紅紫影沈烟霧中。

老雨云。豐艷。

1 早春霞

千家從五位

うす霞はつかに匂ふ春の色をいつか桜のうへに見てまし

2 春雨

梅静逸 出雲松江人

おともなく霞のまよりふる雨を庭の草葉の色に見るかな

3 春曙

森古草 全所人

よそめには花かあらぬか白雲の葛城やまの春のあけほの

4 春日遅

禎祥舎和男 木村氏同所人

桜かり野山のかきり分来ても餘るははるの日影なりけり

5 待花

朱桜岡守手

春されは吉野初瀬の花暦ひらきてまたぬ日はなかりけり

6 花本

本多確介 同所人

帰らむといひつゝ、花の木の本に長居をしたり妹や待らむ

7 春山

千家直子 出雲杵築人

きのふかも雪にかゝけし玉たれの外山の桜はや咲にけり

8 首夏

桂の岡秀年 中村氏出雲松江人

常磐木の古葉とともにちる露のすゝしき夏に成にける哉

9 水鶏

瓠の舎祐之 大河原氏同所人

みなくちの水のおとなひや、更て青田の月に水鶏鳴なり

10 川蛸

松の岡幸雄 丹羽氏同所人

桂川七瀬の淀もよとみなく影をなかせてゆくほたるかな

11 扇

吉城たに子 同所人

手にならす扇の風のなかりせは夏の暑を如何にしてまし

12 萩

桃李園年長 増田氏同所人

夢をはむ獣や萩にやとりけむそよけはさむる夜はの手枕

13 秋野

坪内鹿子 出雲杵築人



露しけき秋のはなの、夕くれは虫の声さへ千種なりけり

14 水辺萩 多豆の舎外弘 内部氏出雲松江人

五月雨に岸うちくゑし谷川の岩間にさける萩のひともと

15 題しらす 佐々木喜蔭 伯耆米子人

夕月夜田中の松もみゑそめて鴨たつかたは露はれにけり 【二号附正誤に「ゑハえノ誤」、「鴨ハ鴨ノ誤」という】

16 十五夜佐夜の中山にて 楓の園洞貝 細野氏出雲広瀬人八十二翁

月影のさやの中山名にしおふこよひこゆるも命なりけり

17 月照紅葉 桃の舎標樹 森氏出雲松江人

山の端の月は紅葉にもみちはは月に光をそふるなりけり

18 寒月 蓬生園與平 桂田氏同所人 【與字不鮮明】

笹のはのさやく霜夜の月影は水なき空のこほりなりけり

19 閑庭雪 苜穂の舎富穂 寺田氏同所人

しつけさを心とすめる庵なれはつもらは積れ庭のしら雪

20 夕恋 岡の舎豊年 岡田氏同所人

暮ぬとて家鳩つかひ帰り来し軒のつまこそ恋しかりけれ

21 涙 中村久慶 同所人

嬉しさにたへぬ涙もあるものを憂にのみとは何思ひけむ

22 寄燈恋 千樹園守夫 仙田氏同所人

わか影をひとりみる夜は中／＼にありて淋しきねやの燈

23 天象 松樹園美蔭 園氏西京人

国といふ国のはてまで行雲のあめの道こそ限りしられね

24 山路にて  
梅見岡須数舞 笠原氏出雲松江人

岩根ふむ山路こ、しみ見かへれば思ひし程は登らざり梟

25 山家井  
稲見の舎義雄 落合氏同所人

世をうしと思ひいりしは山の井のみつから浅き心也けり

26 閑屋  
蓑虫庵小石 根岸氏同所人

夜さへも往来の人のたゑぬ哉戸さ、ぬ御代に逢阪のせき【二弓附正誤に「ゑハえノ誤」という】

27 新聞  
羽山繁樹 同所人

開けゆく御代のしるしは月に日に耳新しき事のみそそく

28 人力車  
檉の舎勇雄 水谷氏同所人

小夜更てきしる車の音すなり誰か夢路をひかれゆくらむ

29 寄菓述懐  
戸田忠幸 同所人

世中にあるかひもなき実無栗なり出しこそ悔しかりけれ

30 富蘭克林  
中村守丘 同所人

心ありてあけにし紙鳶の絲よりや名も海山を伝きにけむ

31 承久帝の皇居跡  
桜か本吉雄 山田氏東京人

しのふにもなほあまりある昔かなあはれ涙の玉しきの庭

32 風月小誌のなれるを  
琴の舎正雄

花細し桜がもとのふかみ草ふかき色香をしるひともかな

【奥付】

明治十三年四月御届

同年同月 出版

編輯兼出版人

嶋根県士族

平賀半助

出雲国松江内中原町

同

同県士族

勝田千之助

同国松江南田町

同

同県士族

村上正雄

同国松江奥谷町

発兌人

同県平民

一年舎

同国松江天神町

【『風月小誌』第二号】

【表紙】

明治十三年六月發行

風月小誌 第貳号

風月吟社

【本文】

引

以<sub>レ</sub>花薰<sub>レ</sub>春。花春之香乎。世之文明猶<sub>二</sub>四時之有<sub>レ</sub>春。歌人詩客之發<sub>レ</sub>其盛<sub>一</sub>。不<sub>二</sub>獨花之薰<sub>レ</sub>春。凡編而入<sub>レ</sub>冊者。皆文明之香也。春香人聞焉而快<sub>レ</sub>之。況文明之香。感<sub>レ</sub>人心<sub>一</sub>者。其為<sub>二</sub>何如<sub>一</sub>歟。雖<sub>レ</sub>然。花可<sub>二</sub>以薰<sub>レ</sub>春。而非<sub>二</sub>花即春<sub>一</sub>也。歌詩可<sub>二</sub>以發<sub>レ</sub>文明<sub>一</sub>。而非<sub>二</sub>歌詩即文明<sub>一</sub>也。讀<sub>レ</sub>此誌<sub>一</sub>者。謂<sub>レ</sub>文明在<sub>レ</sub>此。則非<sub>レ</sub>真知<sub>二</sub>文明<sub>一</sub>者<sub>上</sub>矣。然則此誌也。不<sub>レ</sub>足<sub>二</sub>以觀<sub>レ</sub>文明<sub>一</sub>乎。否否。古人不<sub>レ</sub>曰乎。天不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>舍<sub>レ</sub>鶯花<sub>一</sub>而別作<sub>レ</sub>春。則雖<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>歌詩即文明<sub>一</sub>。可<sub>二</sub>以觀<sub>レ</sub>文明<sub>一</sub>者。亦不<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>歌詩乎。小誌<sub>一</sub>二号成。把<sub>レ</sub>筆即題。老雨居士。

編者云。以<sub>レ</sub>花薰<sub>レ</sub>春自<sub>二</sub>韓文<sub>一</sub>化來。文明之香蓋本<sub>二</sub>尚書<sub>一</sub>。或評<sub>レ</sub>居士之文<sub>一</sub>曰。無<sub>一</sub>一語無<sub>レ</sub>來歷<sub>一</sub>。洵然。

序

百千鳥囀る春は桜花さきにはひ橘のかをれる夏はほと、きす来啼とよもし秋風のふきしく野への花のうへに照る月かけさやけく冬の山辺の木々のこぬれにふりか、れる雪いさきよしはた人をこひしのひ大御代をいはひたふとふも皆これ天地おのつからなる神なからの道にして倭魂もてよみ出る歌のたねならずやはかくてこの風月<sub>二</sub>郎集<sub>一</sub>もかの四時の移るかごとく樛の木のいや継々にたのしくさかえ行くものなりけりとおもひつ、かつ言挙するものは神門臣守手

風月小誌第二号

1 題画

老雨居士

秋風、揺、老樹。落葉、乱、如、雨。一、逕、不、逢、人。鹿、鳴、山、月、午。

2 納涼

积苔洲

夜、静、長、橋、不、起、塵。乘、涼、来、追、月、明、新。垂、楊、風、定、湖、如、練。欄、底、氷、輪、倒、照、人。【三号附正誤に「追ハ趣ノ誤」という】

老雨云。倒照人奇警。恨不使玉池髻仙評之。

3 搗衣曲

鱸香

搗衣又搗衣。誰識妾心悲。清風明月下。一春一淚垂。

老雨云。似「古楽府」。

4 有感

勉齋学人

新春来往少。披卷独傷心。以「数、十、年、昔」。視「三、五、日、今」。人情何反覆。世態幾浮沈。顧、道、如、何、耳。高、風、想、展、禽。

枕山云。造意命筆。急湍行舟。

5 静遠平賀氏招飲咏席上所置盆石 芝石 牧野氏因幡鳥取人

奇、巖、磊、塊、幾、屢、顔。近、在、明、窓、淨、几、間。日、夕、去、来、雲、數、片。無、心、却、学、主、人、閑。

老雨云。意新語穩。

6 寄「懷古人」四首之一 勝部静男 竹園 渡部氏伯耆人

世人称「劍客」。才、辨、我、尤、推。滿、腹、經、綸、志。半、生、坎、壈、時。至、情、勞、菽、水。餘、事、愛、歌、詩。他、日、風、雲、会。期、君、縱、騁、馳。

老雨云。余与「静男」相識。此作真其小伝也。静男嘗為「中教正」。不「得」意辞去。聞今官「司法省」。信否。

7 咏「十六島海苔」

笠山

二、八、巖、礁、激、浪、刃。紫、苔、繁、殖、是、良、田。秋、成、有、候、刈、于、海。東、作、無、勞、種、自、天。初、訝、毳、毳、織、席、卷。徐、看、鬢、髮、梳、雲、連。喜

聞今歲亦豐熟。西望頻垂三尺涎。

老雨云。三四自然。○又曰。海苔俗呼曰「加毛自」。引詩太切。○勉齋云。自「実入」況。老杜境界。如「額聯」則庶幾。

8 春日漫吟

三板居士

紅痕已冷滿衣塵。独臥荒村閑却春。憶昔東山長樂寺。雨中同傘看花人。

高橋愛山云。軋結。自「京之四季謡調」來。○編者云。巧写「旧遊之情況」。何等精緻。

9 咏雁

晋齋 田代氏出雲松江人

淡墨橫空字々分。嗷々叫入曉江雲。雨中月下都多感。莫使深閨孀婦聞。

愛山云。多感。而兼「多情」者。○編者云。咏物佳品。

10 遊芳野次「藤井竹外韻」

蘭窓主人

欲吊英靈履險來。静思往事淚先催。我語「桜花」花解否。万年須「護」此陵「開」。

賴支峰云。未「經」人道破。

11 僑居雜詩

雲滙 三島氏出雲松江人

書帙琴囊与「酒筒」。肩担手挈太匆匆。天公心「是憐」詩客。○。優貸清閑地「一弓」。

老雨云。天憐優貸詩客。亦「不」可「悔」。○勉齋云。優貸字下得妙。

12 過「大田」

寒山 熊倉氏東京人

回頭天地是耶非。奔走多年未「得」歸。孤客胆寒小媛下。不「堪」風雨襲「征衣」。

老雨云。悲壯感憤。是必有「所」為而發者。

13 盆梅

深齋 安井氏名泉字士衡出雲松江人

坐臥偏堪「愛」。磁盆護「美人」。枕、辺、香、不、斷。燈、下、影、相、親。深院把「杯夕」。明窓磨「墨晨」。笑他隴頭客。尽日去尋「春」。

老雨云。前聯「伝神」。咏物宜「如」此。

14 觀梅

楓庵 山下氏長門阿武郡人

蕭寺門前野竹傍。瘦梅臨水白於霜。山僧偶汲黃昏月。併掬橫斜影裏看。

老雨云。清氣冷然。

15贈「桃園醉士」

秋水釣士 松田氏出雲松江人

萋々其葉自成繁。幾樹花深可避暄。中有醉仙能養氣。將言方寸是桃源。

愛山云。高雅曠逸。桃園醉士之境涯可想。○編者云。三四妙甚矣。

16早起涉「園」。

青蛙居士 黑田氏出雲三分一人

茅檐月落紙窓虛。竹樹陰濃清有餘。独涉庭園一人未起。盆池添水護金魚。

老雨云。詩亦清有餘。

17秋日訪「山寺」

勝部重基 出雲坂田人

丹楓烏柏夕陽山。秋色森沈鳥語閑。石逕曳筇尋古寺。塔尖聳在白雲間。

老雨云。淡而雅。

18庚辰一日

岩門居士 岡田氏出雲広瀬人

東窓迎白坐正晨。殊覺瓶梅含笑新。節物亦隨人意改。纔過一夜即回春。

勉齋云。殊覺二字。根坐正晨。而已胚胎第三意味。【已はもと已に作る。今改む】

19觀「菊有感」

篤軒居士 岩崎氏全所人

人也古今變。花乎今古侔。星霜千百歲。尚見晉時秋。

勉齋云。多少感慨。然。人亦有今古之侔者。兄其可知之。

20泛舟

半醒 佐川氏出雲松江人

桃霞桜雪映晴鮮。氣暖湖山春靄然。垂柳之灣芳草渚。有冰魚處便停船。

編者云。一氣呵成。

21秋雨

蓼坪 中村氏駿河靜岡人

月黒陰雲覆「半空」。蕭然疎雨入「簾櫳」。知他三経就「荒処」。秋、蝶、夢、寒、殘、菊、中。【三号附正誤に「経ハ徑ノ誤」といふ】  
老雨云。寒字妙。

22 西京 河原進 出雲楯縫郡人

九陌縱横漲「軟紅」。參差樓閣夕陽中。村童何幸初來「此」。拜得千年古国風。

老雨云。眞是西京詩。

23 咏菊 逐浪 富永氏伊豫宇和嶋人

濃紅澹白一枝々。培養功成漸及「時」。屈指重陽無「幾日」。為編圃畔小笆籬。

老雨云。愛「菊」之情。溢「言表」。○編者云。好詩不「必点」。

24 夜泊 蕉雨閑人 坂田氏出雲松江人

江頭月冷夜漫々。霜氣侵「衣」眠未「安」。忽訝篷窓白「於」雪。扁舟流在「葦花灘」。

老雨云。夜泊往々有「此景況」。非「实践者」恐不「知」。○編者云。画手不「及」。

25 春日田園 樵雲山人 鵜飼氏全所人【三号附正誤に「春ハ夏ノ誤」といふ】

万頃連「雲」麦浪黄。野人此際事「蚕桑」。揭「簾」静坐薰風裏。燕子花辺燕子忙。

老雨云。静忙映帶太好。○勉齋云。平而峻。淡而濃。

26 煎茶 信齋 大野氏全所人

閑汲「前」溪水。「芳」茶煮「石」瓶。「香」煙三四縷。和「月」遶「窓」櫺。

老雨云。清淡。

27 探「春」得雪字 槻陰処士 若槻氏名敬字緝熙全所人

短杖趣「晴色」。春泥路凹凸。柳梢未「著」金。梅萼此「含」雪。流水上「鷗」身。微風鼓「鶯」舌。煙光争入「詩」。不「復」問「工拙」。

【含字にもとレ点なし。今補う】

勉齋云。用字平々。不「似」分「字者」。



28月下独坐

清修閑人 柘植氏名正富字士潤全所人

露、濯、清、輝、一、月、色、明。敲、レ、詩、独、坐、養、幽、情。芭、蕉、時、向、西、風、舞。忽、弘、紗、窓、影、有、声。

老雨云。影有レ声奇語。○勉齋云。好詩好想。使、人、有、塵、外、之、思。

29舟遊

梧軒 山本氏全所人

彩、船、葉、々、棹、西、東。絲、肉、声、飛、籬、箔、中。從、レ、是、一、層、添、興、味。氷、魚、上、罝、夕、陽、風。

老雨云。孰謂、夕陽氷魚。不、若、秋、風、蕁、鱸、乎。

30春日偶成

愛山樵夫 高橋氏同所人住東京

出、城、皆、是、訪、梅、人。墨、水、蒲、田、争、領、春。竹、外、一、枝、掛、寒、月。吾、園、雖、小、却、精、神。

編者云。眞個梅花知己。【己はもと己に作る。今改む】

○

1初春山

桜か本吉雄

あしひきの山をや春の越ぬらむまたらになれる峯の白雪

2里鶯

高橋真全 出雲松江人

うめ咲て鳴音も更にかをるなりこや鶯のかさぬひのさと

3柳辨春

保々光良 石見津和野人

浅みとり春くる色の絲口をひき出すものはやなき也けり

4春雨興

桃李園年長

貝おほひさてや炷物合せてむ今日の春雨やむへくもなし

5春駒

澄川正彌 石見津和野人

母子草もゆる春野にこゑ高くいな、きわたる雲雀毛の駒

6花

小谷古蔭 伯耆会见郡人

くぬき原春とも見えぬ木の間よりまはらに匂ふ山桜かな

7 新樹

千家尊賀 出雲杵築人

芳野山きのふの花のすゑ見れば嵐の上のみつえさすなり

8 湖辺郭公

賞嶽舍久敬 平井氏出雲松江人

一声は矢走の沖になきすて、行へや志賀の山ほと、きす

9 五月雨晴

神樹園永雅 森氏全所人

日をふりし五月の雨の果みえて星の影すむにはたつみ哉

10 御祓

中村久之 全所人

みそき川流れて早き幣見れば夏の行へもよとまさりけり

11 萩

柳の舍能敬 岸氏全所人

促織の声をしるへに来て見れば野への絲萩はな咲にけり

12 秋風

小田つな子 出雲嶋根郡人

軒近き萩かりすて、秋風をきかしとおもへは松に吹なり

13 浦鶴鳴

楠の舍巖 野間氏出雲松江人

波の音は更ゆく月にしつまりてなく声高し和歌の浦つる

14 月前菊

檀の舍栄雄 武熊氏全所人

月照れるそらには星もまねなるを庭にかすそふ白菊の花

15 暮秋虫

小笹重春 全所人

手枕の下に音をなくきりくす更行秋の夜はのあはれさ

16 初冬時雨

亀井重世 出雲広瀬人

昨日たにふりし時雨の雲なから冬立空になとまよふらむ

17 川落葉

桜園中造 羽野氏石見津和野人

水の音はこほりに絶し川面を風に流れてゆく木の葉かな

18 網代

入江清雄 出雲嶋根郡人

あしろ守袖いかならむ篝火の影さへさゆる宇治の川つら

19 霰

岡本松山 出雲松江人

おと高くふる屋の軒のいた庇さしも寒けき初あられかな

20 初雪

竹の舎真純 長谷川氏全所人

朝またきめせといふなる大原女か妻木に雪を見初つる哉

21 寒夜衾

別火千秋 出雲杵築人

かさねても衾おもしと思はぬは身より心の寒きなりけり

22 炭竈

赤木真澄 出雲松江人

燠まさる炭のけふりに山里のとしのさむさも顕れにけり

23 名立恋

禎祥舎和男

泪川袖のしからみくさもれて流れやすきはうき名也けり

24 寄嵐恋

松岡千年 出雲意宇郡人

こぬ人をまつ板戸の徒におとなふ物はあらしなりけり

25 寄烟恋

岩本松蔭 出雲松江人

あらはれて空に煙は立にけり恋のなげきは下もえにして

26 友

朱桜岡守手

魂あへるやまと心の人もかなともになかめむ山さくら花

27 詠史

富永楯津 出雲杵築人

ありときく神の御国のかしこさに船腹ほさす貢き初む

28 丹後国琴引の濱にて 松竹園忠成 大江氏出雲松江人

打よする波のつゝみも松風のしらへにかよふ琴引のはま

29 述懐 観露園高行 内藤氏出雲広瀬人

覚束な身の行末のあらましも昨日にかはるけふを思へは

30 瓦斯燈 桂樹園心典 和多田氏出雲松江人

開け行御代のひかりとあふくかな市路か、やく夜半の燈

31 蒸気車 桜園三綱 北嶋氏出雲杵築人

ゆくと来と煙みたれて轟くはほのいかつちや車ひくらむ

32 道 千家従四位

人の世となりてそ殊にひらけゝる神のつくりし諸のみち

一号正誤

五葉表四行浮世ハ世ハ上ノ誤 七葉表十行系ハえノ誤 全葉全行鴨ハ鳴ノ誤 八葉表八行系ハえノ誤

【奥付】

明治十三年六月御届

同年同月 出版

【「定価四銭」の押印あり】

編輯兼出版人

嶋根県士族

平賀半助

出雲国松江内中原町

同

同県士族

勝田千之助

同国松江南田町

同

同県士族

村上正雄

同国松江奥谷町

発兌人

同県平民

一年舎

同国松江天神町

【『風月小誌』第三号】

【表紙】

明治十三年八月発行

風月小誌 第三号

風月吟社

【本文】

千紫万紅以粧「陽春」。人視以楽焉。詩之在「人世」。猶「花」之在「陽春」。斐然粲然。以装「斯文」。作者楽焉。読者亦楽焉。

然以「實用」論之。春花之爛熳。不<sub>レ</sub>及「秋実之穰々」也。詩之於「人事」亦然。昔人或謂<sub>レ</sub>於「詩可<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>修身齊家平天下之道」。我不<sub>レ</sub>取也。郷人平賀静遠。勝田睡仙。頃編<sub>二</sub>同好之詩歌<sub>一</sub>。命云<sub>二</sub>風月小誌<sub>一</sub>。及其第三稿成<sub>一</sub>。求<sub>二</sub>一言於<sub>レ</sub>余。余辭<sub>レ</sub>之。不<sub>レ</sub>聽。乃受而評<sub>レ</sub>之曰。卷中諸詩。綺麗嬌艷如<sub>二</sub>牡丹海棠<sub>一</sub>乎。冷淡高逸如<sub>二</sub>素梅碧李<sub>一</sub>乎。其他為<sub>レ</sub>杏。為<sub>レ</sub>桃。為<sub>レ</sub>芍藥。為<sub>二</sub>瑞香<sub>一</sub>。皆有<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>觀者<sub>一</sub>焉。而千紫万紅之爛熳。不<sub>レ</sub>唯於<sub>二</sub>陽春<sub>一</sub>。四時不<sub>レ</sub>斷<sub>二</sub>其芳<sub>一</sub>。則作者之樂可<sub>レ</sub>知。而讀者之樂亦可<sub>レ</sub>知也。我復何贅哉。愛山高橋基一。識於<sub>二</sub>東京赤坂百花書屋<sub>一</sub>。

## 序

月のむしろ花の本あるは折にふれ事に臨みてうたひいて思ひをのふるは唐にやまとにいく千万とあれと人毎にしらへかはり巻ことにすかたひとしからすけにやそのおもての如く同じからぬ人のこゝろを種なる言の葉なればさる理にやあらむ更にまた空蟬のよのうつりゆくまに／＼人の心のおもむく所もつかの木のいや継々にあらたなるをやされは古今にわたりて歌ふみてふもの濱の真砂のかすしけ、れとつひに尽せぬものには有けらし今この風月のふみなりそめて早早三まきになりぬ猶いやしきによる浪の間なく時なくからにしき倭錦のあやおりて目をよるこはしめ心を慰めむものそとまち樂むものは桃李園の老夫長年

## 風月小誌第三号

1 辛未季夏。於<sub>二</sub>東京客寓<sub>一</sub>作<sub>二</sub>一絶句<sub>一</sub>。贈<sub>二</sub>平賀静遠<sub>一</sub>。 寛堂 松平直応

知君誠意自通<sub>レ</sub>神。積歳幽冤忽得<sub>レ</sub>伸。世上浮沈何用<sub>レ</sub>問。后天必竟護<sub>二</sub>端人<sub>一</sub>。

老雨云。静遠之受<sub>レ</sub>冤。在<sub>二</sub>竹腰侯之邸<sub>一</sub>。侯愛顧不<sub>レ</sub>措。以<sub>二</sub>公治長<sub>一</sub>比之。居三年。乾旋坤転。事皆氷釈得<sub>二</sub>放帰<sub>一</sub>。

此詩之寄正在<sub>二</sub>其時<sub>一</sub>。人孰無<sub>レ</sub>冤。如<sub>二</sub>静遠<sub>一</sub>冤之尤甚者。而今俯仰不<sub>レ</sub>恥。優遊以卒<sub>レ</sub>歳。豈不<sub>レ</sub>亦聖代之沢<sub>レ</sub>哉。余於<sub>二</sub>此事<sub>一</sub>非<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>關係<sub>一</sub>者。讀<sub>二</sub>此詩<sub>一</sub>憮然久之。【両侯字もと候に作る。今改む】

2 辭<sub>レ</sub>官<sub>レ</sub>歸<sub>レ</sub>鄉<sub>レ</sub>留<sub>レ</sub>別<sub>レ</sub>松<sub>レ</sub>江<sub>レ</sub>諸<sub>レ</sub>子<sub>一</sub>

樺村閑士 佐藤氏周防熊毛郡人

自負秋風張翰興。鱸肥時節去松江。欲酬清世無如老。休道見機辭異邦。

老雨云。真是俱令詩。三四君子言。

3 首夏山居分韻得魚

笠東 森山氏出雲松江人住西京

滿山新翠雨晴初。長昼如年倦讀書。童子時携香餌去。落花漲處釣溪魚。【釣字下もとレ点。今改む】

渡部竹園云。有趣。

4 秋夜宿山寺

三翠 小川氏名善淵字深脚出雲松江人

寂寞山房夢自空。一声鳴鹿月明中。題詩欲借仏前燭。吹滅蕭々窓隙風。

竹園云。幽峭。

5 雨窓讀書

半村 飯島氏出雲松江人

春到庭梅清有餘。煙籠園柳眼先舒。鳥声寂々無人訪。細雨幽窓独讀書。

老雨云。結句得漁洋髓。○勉齋云。若個閑況難向風塵說上。

6 避暑 六言

重教散人 金本氏名重教字字典出雲神門郡人

柳逕環崖左右。板橋跨水西東。茸々綠葉遮日。冉々漣漪送風。

竹園云。涼意可掬。

7 挿梅

恥齋 山本氏名堅字子固出雲神門郡人

胆餅貯水挿梅花。第一寒香占歲華。不羨孤山千萬樹。愛看疎影小橫斜。

老雨云。安分語。

8 訪伯州米子法藏寺席上望大仙山

原知敏 出雲松江人住陸中

來尋盟約叩禪闕。香影茶声脱世寰。坐愛此居風景大。小窓自在見仙山。

竹園云。不用修飾自然成詩。

9 江上春望

吳淞 稻田氏出雲広瀬人

長江寥闊夕陽紅。春在綺羅飄瞥中。樓上美人遮不得。踈簾吹颺柳絲風。

阪本蘭窓云。艷麗。結妙甚。○竹園云。婉麗。使人自動遊春之情。

10 春遊

復軒 三刀氏全所人。

寄迹浮雲都自在。只須携酒醉煙霞。富堤晴景月山雨。探遍春村处处花。

老雨云。筆亦自在。

11 杵築灣矚月

盛穀 原田氏出雲松江人

海面波平夕照閑。行舟相趁出晴灣。前帆已沒後帆未。看入水天杳渺間。

老雨云。三四美景。

12 山居

淡齋 山中氏出雲広瀬人

山中絕塵事。愛靜構茅茨。家睦貧而樂。身閑賤最宜。濁醪堪養老。疎食足充饑。安命心常適。無逢不自怡。

蘭窓云。恬澹之情述得好。非安命者則不能道。

13 自美保閑 婦舟中作

枕水 山根氏出雲松江人

島霧汀煙次第晴。波平海面鏡如明。江山倒蘸清灣水。舟在丹青画上行。

蘭窓云。三四奇警驚人。

14 秋日溪居

瘦篁 小林氏全所人

葉樣扁舟是我家。一竿風月寄生涯。沙禽声冷秋將老。滿岸西風乱荻花。

蘭窓云。秋意可愛。宜乎寄生涯。

15 挿秧

榴窓 永井氏名博孝字士和全所人

野婦村姑交作行。笠蓑衝雨挿秧忙。童歌翁鼓頻相勵。百畝平田一刻蒼。

竹園云。無適無莫者乎。



16 秋夜

臨齋 秋庭氏全所人

幽庭風斷樹声乾。琢句閑凭卍字欄。夜半霜飛山月白。籬邊殘菊晚香寒。

編者云。極冷澹之致。

17 秋朝

杏園 松本氏出雲本庄町人

夜來風雨過。園菊花狼藉。早起喚家僮。丁寧修竹柵。

蘭窓云。真個愛菊者。可謂五柳先生好友。

18 雪中探梅

瓦全居士 天野氏名龍字祖榮出雲松江人

行尽林垆又水隈。吟筇不厭雪成堆。香風細々薰衣袂。認得橋南一樹梅。

苔洲云。一篇詩語碎金作例人皆輕之。僕則以為詩上乘。○老雨云。苔洲所以為詩人在此。僕大服此評。

19 夏日錦莊小集分韻得文

勝田保興 睡仙男

松竹困窓鎖夕曛。綠陰深處絕塵紛。群蛙声急天將雨。望裏湖山半是雲。

中村笠山云。平淡佳境。

20 春晚

春坡 渡邊氏隱岐人

無復黃鸝奏艷歌。湘波簾外夕陽斜。女兒也惜春風老。相喚相呼拾落花。【外字にもと傍点なし。今補う】

竹園云。凄婉可誦。

21 十日菊

淞陽漁士 奥田氏出雲松江人

陶家三徑未全荒。留得東籬晚節香。若有白衣來送酒。一杯更醉小重陽。

蘭窓云。前日之酒尚在焉。何待白衣來。

22 雨中探梅圖

綠香散史 平林氏出雲意宇郡人

前霄俄暖雪初消。泥路探梅豈厭遙。好是香風吹不斷。一蓑春雨渡溪橋。【霄は当に宵に作るべきか】

蘭窓云。無限風趣。

23 題画

桓齋 神山氏出雲広瀬人

茅屋兩三煙靄間。鬱葱茂樾隔塵寰。溪辺時見曳筇客。心是前村沽酒還。

蘭窓云。合作。○又云。使汝陽逢之。定知流涎三尺。

24 早秋夜作

碧湖漁夫 清水氏出雲松江人

星文易位朗秋空。涼意凄然夜欲中。獨立階前人不見。松陰光小石燈籠。

竹園云。結末実況。宛然如見。○編者云。後半宜園社中口吻。

25 松江秋夕

魚東逸史 山本氏名良秀字君英出雲秋鹿郡人

烏柏霜楓映緑波。占晴江上夕陽多。孕風帆腹便々大。十六丹崖一瞬過。

勉齋云。是詩是画。

○

1 初春見鶴

朱桜岡守手

霞たつ日の若宮やいてつらむ天路にむれてたつ遊ふ見ゆ

2 愛梅

鳴重養 出雲杵築人

またさかぬ花の都の道かへてうめ見に行む小野のふる里

3 万物感陽和

中村守丘

丹生川やとくる水のひまとめて唸<sup>アキトウ</sup>うをも春やしるらむ

4 春曉月

河野小弁子 出雲松江人

宵の間に霞みしよりもあはれなり花にかたふく有明の月

5 山吹

莠の園敏郎 田中氏出雲広瀬人

やまふきの花の盛となりにけりいさ見に行む井手の玉川

6 鞆中暮春

真弓の舍真嬖妣 足立氏出雲松江人

此ゆふへ春に別れて旅ころも更にも袖をぬらしつるかな

7 首夏蝶

村松きゑ子 全所人

おなし色に咲うの花のしつ枝より出て胡蝶は頭れにけり

8 里卯花

須我の舎道雄 出雲大原郡人

ひさかたの桂のさとの卯花は月の影かとあやまたれけり

9 鶉河

和田歳貢 駿河沼津人

むすほる、瀬々の鶉繩を益荒男かとも流る、篝火の影

10 名所蓮

岡崎小幸子 出雲松江人

勝間田のいけ水すみてしら露のかけも涼き花はちすかな

11 泉

杉村孝誼 駿河沼津人

おと立て岩間もりくる真清水は結はぬ先に袖そすすしき

12 河夏祓

森武平 出雲松江人

かは風にこころ涼く御祓して世のうきことも水無月の空

13 立秋

蘭園富義 神谷氏出雲松江人

久方の雲のゆきかひあら立て空にしらる、秋のはつかせ

14 早秋虫

勝部瓶比古 出雲大原郡人

なき初るむしの音きけり浅茅原露より外の秋も来にけり

15 鷹

高畑智義 出雲松江人

はつかにも楫の音きこゆ空の海の雲の波わけ鷹渡るらし

16 月

小谷古蔭

あかす見し雲井の月のをち水は頭の霜となりにけるかな

17 秋月勝春花

旭照舎敬明 平井氏出雲松江人

山深くわけ入て見し花よりも月のあはれは奥なかりけり

18 擣衣

梅園正富 柘植氏同所人

秋の夜もふけにけらしな賤の女か打や砧の音たゆむなり

19 山初冬

樹楽庵長閑 市川氏同所人

今朝よりの冬とも更に思はれす雪を常なる富士の高根は

20 朝霜

熊谷実平 全所人

ちりつみし松の古葉に霜見えて朝風さむしをかのへの里

21 月前水鳥

勝部綾太理 出雲大原郡人

三嶋江や蘆間に眠るをし鳥の床もあらはに月さえにけり

22 里雪

鳴多豆夫 出雲杵築人

豊年のしるしをつみて宝田の千代田の里に雪ふりにけり

23 見恋

高木丘山 駿河静岡人

仄かにも月の光を見てしより思ひの雲のはる、夜そなき

24 析恋

村上博 陸前人

みしめ縄懸て析しかひもなしむすひの神や名のみ成らむ

25 逢恋

森本後凋 因幡鳥取人

逢見れはうきに年へし玉のをの絶さりしさへ嬉しかり梟

26 山家水

松の舍司 沢氏出雲松江人

たつね来る人こそなけれ柴の戸に音信たえぬ谷川のみつ

27 餞別贈弓

桃李園年長

放つとはつらき名なれと手束弓やかて帰ると云か嬉しさ

28 龜 千家尊賀

万代とた、へし濱は住龜のとし波よする名にこそ有けれ

二号正誤

壹葉表五行追ハ趣ノ誤 四葉裏初行経ハ径ノ誤 五葉表五行春ハ夏ノ誤

作レ詩難。評レ詩更難。非ニ善作者 雖レ評不レ当也。松江詩人評余詩ニ為ニ小兒学レ語者。余詩誠不レ成レ語也。其評為ニ小兒者当矣。猶何暇レ評ニ人之詩乎。静遠睡仙二史。自ニ松江ニ通ニ此冊 来懇レ評。可レ謂下責ニ難於レ人者矣。幼舌呪嘔。使ニ之判ニ曲直。人孰信レ之。雖然。非ニ我之求レ於ニ二史。二史之求レ於レ我也。人虚レ己以来。我尽ニ吾事ニ已。至ニ当与レ不レ当。自有ニ輿論在。乃妄ニ批所レ見。以問ニ之大方。其亦必有ニ不レ成レ語者。老雨居士

【奥付】

明治十三年八月御届

同年同月 出版 【「定価四銭」の押印あり】

編輯兼出版人 嶋根県士族

平賀半助

出雲国松江内中原町

同 同県士族

勝田千之助

同国松江南田町

同

同県士族

村上正雄

同国松江奥谷町

発兌人

同県平民

一年舎

同国松江天神町

本訳注は、

・島根大学法文学部山陰研究センター山陰研究プロジェクト

二〇一〇―二〇一二年度 山陰地域文学・歴史関係資料の研究

による成果の一部である。

代表者 要木純一